

2 研究の目的と経過

(1) 「兵庫県立考古博物館」の整備

兵庫県内には約26,000箇所の埋蔵文化財包蔵地があり、兵庫県の地域史を解明する上で重要な歴史遺産として調査研究の対象となっている。県教育委員会では、1989（平成元）年に設置された埋蔵文化財調査事務所（神戸市兵庫区所在）が、国・公団・県関係の開発事業にともなう埋蔵文化財調査を一手に担い、多くの出土品をはじめ膨大な調査成果を蓄積してきた。しかしその成果については、一部の出土品を県立歴史博物館（姫路市所在）で展示公開しているのみで、大部分の出土品は調査報告書刊行後、収蔵庫の中で保管されたままの状態であった。

調査成果の公開活用は県教育委員会にとって積年の課題であったが、そのための拠点となるハード整備の計画が具体化したのは、阪神・淡路大震災からの復興・復旧事業にともなう発掘調査が一段落した後の、2002（平成14）年のことである。この年に「兵庫県立考古博物館（仮称）基本構想」を策定し、加古郡播磨町大中の大中遺跡（国史跡）の隣接地に、展示公開をおこなう博物館と調査・収蔵をおこなう埋蔵文化財センターの機能をあわせもつ施設を整備する基本方針が定まった。

兵庫県で考古博物館の計画が具体化した時期は、構造改革にともなう厳しい目が公共の文化施設にも注がれた結果、全国各地で博物館の存在意義が問われ、施設の統廃合や指定管理への移行など、博物館全体が大きな変化にさらされていた頃である。このような厳しい環境の中、県民の理解と支持を得ることができる博物館づくりを実現するために、これまでの博物館のイメージを変える新しい博物館像を模索しながら、「新スタイル・参加体験型博物館」をキャッチフレーズに博物館の整備計画が進められた。

(2) 「王墓」再現計画のスタート

博物館の核心となる展示は、従来の博物館のような資料展示を中心としたものではなく、“こども”をメインターゲットにした、双方向的（インタラクティブ）なものにすることを基本的な方針とした。展示の具体的な内容については、2003（平成15）年に利用者調査の結果などをふまえた「兵庫県立考古博物館（仮称）基本計画」を策定し、「人」・「環境」・「社会」・「交流」の四つのテーマで展示を構成することになった。

このうちの「社会」が本報告書に成果を掲載している雲部車塚古墳の研究のきっかけとなった展示である。「社会」は「人と人が争いを克服し、平和に暮らすための知恵を身につけていく」過程をテーマとした展示であり、時代としては弥生時代中期後半から奈良時代までを対象としている。

弥生時代中期の高地性集落や武器の発達から読み取れる「戦い」のはじまり、弥生時代末期の首長墓の出現から読み取れる「王」の出現、前方後円墳の出現や鏡の分布から読み取れる「大和」を中心とした王権の成立、古代官道や役所の整備から読み取れる「律令国家」の成立と、段階をふんで構造化していく「社会」の変化を通じて、「人間の知恵と工夫」の可能性を伝えることがこの展示のねらいであった。このうち「大和」を中心とした王権の成立をテーマとした展示の中で、王権の構成員であった「地域の首長」の具体像を示すために、各地で最大規模の古墳がつくられた古墳時代中期の首長の姿の再現と、その社会的な位置を示す手がかりとなる王墓の再現をおこなうことになった。

当初、再現計画の候補として上がったのは、この直前に発掘調査がおこなわれた近畿地方最大の円墳である茶すり山古墳（朝来市所在）であった。最近の調査であるため、埋葬施設に関するデータが豊富で

あることや、出土遺物の豊富さが候補に上がった理由であったが、テーマとの関係からいくつかの課題があった。

一つは茶すり山古墳が円墳であるということである。前方後円墳という墳形の共有が、大王と地域首長との関係を視覚的・精神的に担保するものであるということが「前方後円墳体制」とも呼ばれる古墳時代の社会秩序の根幹であった以上、博物館で展示すべきはやはり前方後円墳であるべきではないか、それも兵庫県を代表する規模の古墳であるべきではないか、というのがその理由である。

もう一つは木棺を埋葬施設とすることである。当時の大王や地域首長の棺としては、地元の兵庫県高砂市周辺で産する「竜山石」で製作された長持形石棺が最上のランクにある。しかし茶すり山古墳は、これよりランクの下がる埋葬施設であった。地域の伝統的墓制との関連をみせるなら、茶すり山古墳の埋葬施設でもよいが、大王と兵庫県内の地域首長との関係を端的にみせるためには、長持形石棺を再現するのがふさわしいのではないか、ということであった。

このような課題をクリアできる古墳として候補に浮上したのが、雲部車塚古墳であった。

(3) 「雲部車塚古墳研究会」の発足

雲部車塚古墳が展示の候補となったのは、1) 兵庫県下第2位の規模をもつ前方後円墳であること、2) 過去の発掘の記録が残っており埋葬施設の状況が具体的に把握できること、3) 出土遺物の一部が京都大学で保管され現存すること、の三つの理由による。

しかしこの古墳に関してもいくつかの大きな課題があった。1) 陵墓参考地として宮内庁の管理の下にあり、既存の資料以上に遺跡に関する詳細なデータを取得することが困難である、2) 100年以上前の調査であり、その当時の記録がどこまで信用できるのか問題がある、3) 出土遺物の正確な図面がなく、副葬品の再現には、基礎調査からの膨大な作業が必要となる、というのがおもな課題であった。

再現計画の前途には大きな困難が予想されたものの、既存のデータを利用しながら、スタッフのできる範囲で作業を進めていくということで課題を先送りして、2004（平成16）年度末には雲部車塚古墳の竪穴式石槨の再現、丹波の首長の姿の再現を盛り込んだ展示設計（設計：乃村工藝社）がアップし、展示製作に向けて作業を開始した。

しかし、この計画が進展中の2004（平成16）年、宮内庁書陵部による雲部車塚古墳（雲部陵墓参考地）の墳塋裾護岸その他工事にとまなう事前調査が実施され、墳丘や埴輪についての新たなデータが得られることになった。これは当館の事業とは直接関係のない宮内庁書陵部が計画・実施した調査であったが、これをきっかけに雲部車塚古墳の研究は新たな段階へと進むことになった。

展示製作は、出土遺物・石槨・石棺の復元作業を併行して進めたが、このうち出土遺物の復元品製作の具体化に向けて、2005（平成17）年8月に、兵庫県教育委員会の担当者が京都大学総合博物館を訪問し、展示製作への協力の依頼と今後の作業の進め方について協議をおこなった。その結果、雲部車塚古墳出土遺物の資料調査を、京都大学総合博物館・京都大学考古学研究室と兵庫県教育委員会との共同研究として実施するよう提案を受けた。

また同じ頃、2004（平成16）年の発掘調査に関連した資料調査として、宮内庁書陵部でも雲部車塚古墳出土遺物の資料化が計画され、京都大学総合博物館に対し申請がおこなわれた。結果的に雲部車塚古墳出土遺物をめぐって2件の調査研究が同時期におこなわれることになったため、京都大学側に調整をお願いし、京都大学・兵庫県教育委員会に、宮内庁書陵部も加えた三者による共同研究の可能性を探っ

たが、最終的には、研究会は京都大学と兵庫県教育委員会のメンバーで構成し、宮内庁書陵部には協力者としての研究会への参加とともに、調査成果の提供を依頼することになった。

以上のような経緯を経て、2006（平成18）年12月に兵庫県教育長から京都大学総合博物館長に対し、雲部車塚古墳の調査研究への

協力を依頼し、京都大学総合博物館・京都大学考古学研究室・兵庫県教育委員会の関係者からなる「雲部車塚古墳研究会」を組織して、共同研究を進めることとなった（第1表）。

第1表 雲部車塚古墳研究会の体制（2006（平成18）年度発足時）

所属		氏名
京都大学総合博物館	教授	山中 一郎
京都大学大学院文学研究科考古学研究室	助教	阪口 英毅
兵庫県教育委員会考古博物館開設準備室	室長	井守 徳男
	担当係長	村上 泰樹
	主査	中村 弘 多賀 茂治
兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所	主幹	池田 正男

（4）研究の目的

「雲部車塚古墳研究会」は、雲部車塚古墳の墳丘・埋葬施設・出土品について、関係機関の共同による調査研究を実施し、その成果を公開活用することを目的としている。内容としては、1）『車塚一蒔』など1896（明治29）年発掘調査時の記録に関する文献資料調査をおこない、過去の古墳の状況や埋葬施設の構造に関する情報を収集する、2）宮内庁書陵部による墳丘調査の成果や、篠山市教育委員会・兵庫県教育委員会による周庭帯の調査成果を検討し、墳丘の規模や構造について検討をおこなう、3）京都大学総合博物館に保管されている1896年出土遺物の図化・写真撮影をおこない、古墳の時期や副葬品の特色について検討する、という三つの作業をおこなうこととした。このうち1）および2）については、篠山市立中央図書館など関係機関の協力を得て、兵庫県教育委員会がおもにおこない、3）については、宮内庁書陵部の協力を得て、京都大学がおもにおこなうことになった。

とくに1896年出土遺物については、1997（平成9）年に京都大学総合博物館において開催された春季企画展『王者の武装—5世紀の金工技術—』の展示解説図録などで一部の資料の写真が公開されていたが、いまだにすべての遺物について図面や写真が公表されていなかった。そこで研究者が広く利用できるかたちで図面・写真を公表することを今回の研究会活動の主目的として活動を進めた。なお、資料化作業の分担については第3章第1節に詳述しているので、そちらを参照いただきたい。

（5）研究の進展と考古博物館の開館

資料化の作業は、実測・写真撮影とも2007（平成19）年にはほぼ完了し、その成果に基づく復元品製作も順調に進められた（第2表）。兵庫県立考古博物館で製作したのは、①竪穴式石槨復元模型（実大・樹脂製）、②長持形石棺復元品（実大・竜山石製）、③石槨内副葬品復元品（実大・樹脂製）、④埴輪復元品

第2表 調査研究スケジュール

内 容	平成18年度	平成19年度	平成20年度	平成21年度
埋葬施設の検討	////	////		
墳丘の検討	////	////		
出土品実測	////	////		
出土品X線撮影		////		
出土品写真撮影		////		
出土品復元	////	////		
埋葬施設復元	////	////		
報告書作成			////	////

2 研究の目的と経過

(実大・土製)、⑤墳丘模型（樹脂製）、⑥大刀・冑復元品（実大・金属製）、⑦古墳時代の王の復元像であり、その製作にあたっては、研究会で作成した図面・写真を活用している。

2007（平成19）年10月に兵庫県立考古博物館が開館し、雲部車塚古墳の竪穴式石槨は100年の時を隔てて、再び我々の眼前にその姿をあらわし、古墳時代の地域の首長墓の壮大さを来館者に伝えている。

（6）報告書の刊行

当初の計画では、2008（平成20）年に研究成果のとりまとめをおこない、報告書を刊行する計画であったが、諸般の事情により1年遅れの2009（平成21）年に、兵庫県立考古博物館研究紀要の第3号として調査研究報告をおこなうこととなった。このため、2009（平成21）年5月に報告書作成にかかわる最終的な打ち合わせや、原稿の検討をおこない、報告書刊行に向けて作業を進めることになった。

報告書の執筆は京都大学・兵庫県立考古博物館の「雲部車塚古墳研究会」関係者以外に、宮内庁書陵部、(財)元興寺文化財研究所の方々にも依頼した。編集作業は京都大学がおこない、印刷などの刊行にかかわる実務は兵庫県立考古博物館がおこなった。

（多賀茂治）